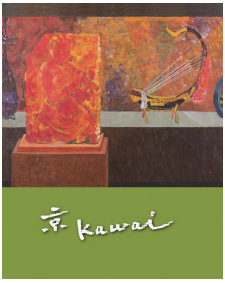
画集「京 Ｋａｗａｉ」の紹介

巨鼇編集グループ

昭和35年卒、観一高同期生で現代女流画家・河合（田岡）京子さんが、小学校3年生の頃から長年描きためた絵画を、画集「京 Ｋａｗａｉ」として今年2月に発行された。掲載されている作品は１５０点近くあり、Ａ４版相当で１００ページに及ぶ大作です。「油絵」は46点、「素描」が56点、「子供時代の鉛筆画集」42点などが、製作年代別に掲載されている。作品は、日展の他、創元会展、岡山県展、日洋会展に出展されたものである。日展では15回も入選されています。

美術ジャーナリストの柳生尚志さんが、この画集発行にあたって寄稿文を書いてくださった。その中で、河合京子さんの作品は、大胆な色彩とタッチ、そして非凡な構成力がこの人の生き様を感じさせるとある。また、画集にある子供時代の筆力に目を奪われたとある。子供時代（小学校3年生～高校生）に、観音寺在住の木版画家・門脇俊一氏（１９１３～２００６）の「日曜画塾」に通った時代のデッサン指導が異色であったようだ。河合さんご本人も、この子供時代が画家としての「原点」と述懐されている。

今回は、画集の序文、あとがきと、代表的な「油絵」と「素描」から2点ずつと、「子供時代の鉛筆画集」から4点を紹介します。



河合さんの油絵は、母校・観一高の校長室に掲げられているそうです。なお、「画集」全体は、当支部のホームページに掲載させて頂く予定です。

文責　小野喬啓　観一・11回（昭和35年卒）

画集「京 Kawai」

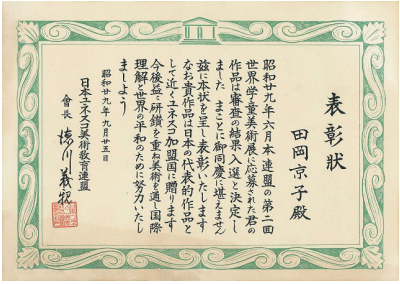
観一・11回　河合　京子
（昭和35年卒）

一、私と絵の出会い

医師であり文人であり、また風流人であった故・田岡種茂を父に、やさしい母・ヤスとの間に、男二人、女四人の六人兄弟の末っ子として生まれました。

私と絵の出会いは小学校三年生の頃、父と門脇俊一先生の展覧会を見に行った時のことです。「京子、この先生について絵を習ってみるか！」のひと言が、私を絵画の道に誘い込んでいきました。土曜日の午後と日曜日の午前中、日曜画塾に通い、コンニャクから豆腐、ピーマン、ナマコに藁ぞうりまで、デッサンは千枚以上。

昭和29年ユネスコ世界学童美術展に応募したところ入選することが出来、副賞としてソ連大使館賞をいただきました。出品した絵は世界中を巡回するから、手許には帰ってきませんということでした。小学校六年生の頃から、将来は画家になりたいという大きな夢をもっていました。やがて高校二年生になり、進路決定の折、父に「芸大」へ進みたいと話すと、「女が絵描きになると、結婚もしないでパリなどに行き、ろくなことにならない」と猛反対され、女子大の食物学科に進み、卒業と同時に婚約、結婚という父の敷いたレールの上を走ることになりました。


表彰状

田岡京子殿

昭和廿九年六月本連盟の第二回世界学童美術展に応募された君の作品は審査の結果入選と決定しました　まことに御同慶に堪えません

茲に本状を呈し表彰いたします

なお貴作品は日本の代表的作品として近くユネスコ加盟国に贈ります

今後益々研鑽を重ね美術を通し国際理解と世界の平和のために努力いたしましょう

昭和廿九年九月廿五日

日本ユネスコ美術教育連盟
會長　博川義雄

世界学童美術展に入選時の表彰状
（絵はﾕﾈｽｺ加盟国に贈られた）

二、画家として、母として

二男一女の母となったのちも絵画への志を捨てきれず、

再び絵筆を取ることになりました。外科医を開業した夫の医院経営を助け、栄養士として、また経理から受付事務まで、母、主婦として多忙な合間を縫っての創作活動が続きました。夜十一時頃からアトリエに入り、気がつけば背後が白みかけるということもしばしばでした。こんな、私の三役も四役もこなす生活態度に、初めはいい顔をしなかった夫や子供たちも次第に理解を示してくれるようになりました。睡眠時間を削って、どんなに多忙であっても好きな絵に没頭できることは幸せでした。

三、原　点

私の画風は大胆な筆致と繊細な色彩感覚。昭和45年、故・鈴木千久馬先生に見出され、創元会に入会して中央画壇にデビューすることになりました。絵の世界の右も左もわからないまま絵描きの仲間入りをした私ですから、子供の頃によく描いたチャボや喧嘩鳥、琴弾公園の松林などを、想い出すままに大きなキャンバスに次々と発表しました。

昭和57年、「電柱のある風景」で第14回日展初入選を飾り、生涯この道一筋に精進しようと心に決め、これまでに15回日展に入選出来、日展会友となりました。日展に出品して、ちょうど十年目にして初入選をはたすことが出来ました。

絵は生き方を映すと云いますが、精神性はもちろん、テーマを決めてイメージを広げながら、号数決定に始まり、全体の構築、直線と流動線、暖色と寒色の比率とそれぞれの響き合い、マチエールなどで構成され、毎日の生活をすることと絵画をすることが別のものとは考えられません。一心不乱に絵筆を走らせるとき、ふと古里のことが脳裏をかすめることがあり、庭の桜と有明浜の白砂青松が清涼剤になっていました。

私はこれまで、故・門脇俊一先生、故・中村一郎先生の二人の良き師に恵まれ、今日まで描き続けることが出来ましたことに深く感謝申し上げます。

幼い頃、画用紙に初めて鉛筆を走らせたときの感覚が、今でも指先にはっきりと想い出せます。その時から今日までひたむきに描いて参りました。それは、永いようであり短い歳月でした。いつも、今度こそは安心して自作の前に立てるような絵を描きたいと念じながらも、意のままにならず、はずかしい次第です。「色と形」という絵画の原点を見つめ、常に小心にして大胆で、上品でいて粗野な絵を描きたいと思っています。はてしない絵の世界に踏み入ってはみたものの、その道を探しあぐねている私です。一切の生きとし生けるものに対して有するひたむきな愛情が、一斉に開花したことによるものと思います。どうかお導き下さいませ。

四、河合京子さんの画業

美術ジャーナリスト　柳生尚志

河合京子さんの作品は長年、創元会展、岡山県展、日洋会展などで拝見してきました。大胆な色彩とタッチ、そして非凡な構成力はこの人の生き様を感じさせる。

この度、「京Ｋａｗａｉ～　河合京子画集」として画業のすべてを観賞すると、その非凡さは並々ならぬものであることを改めて強く感じとったのである。

画集は、「油絵」、「素描」、「子供時代」の構成だが、まず子供時代の筆力に目を奪われた。子供時代とは小学校三年生の時から高校生まで、観音寺市在住の木版画家・門脇俊一氏(１９１３～２００６)の「日曜画塾」に通った時代だが、この画塾のデッサン指導が異色である。鉛筆画のモデルに、こんにゃくや豆腐、ナマコなど、ものと形、質感の表現が極めて困難な物体をあえて描かせている。画集には作品と師の評が掲載されているが、小学校低学年の少女である京子さんが難題に果敢に挑戦、「画面一杯に才能と努力を」表現している。柔らかい四角なものどうしの組み合わせ「豆腐とこんにゃく」では、それぞれの切り口の面には一つ一つに写実を越えた独自の創造世界が表出されており、その才覚には感嘆させら

れる。本人自身も、この子供時代が画家としての「原点」と述懐されている。「素描」に見る人物のとらえ方の的確さとデフォルメの見事な融合は、この時代に培った写生力が下敷きである。

この非凡な少女も、芸大進学は親の強い反対で断念、岡山市の医家へ嫁ぎ、やがて三児の母となるが、子育てが終わるや否や画筆を持ち始める。１９７０年（昭和45年）、日展出品のための勉強会に参加、指導に来岡された鈴木千久馬先生（日本芸術院会員、創元会創立メンバー）にその才能が認められ、以後、創元会展と岡山県展で活躍、１９７８年の県展で知事賞、１９８２年の日展に初入選を果たすのである。

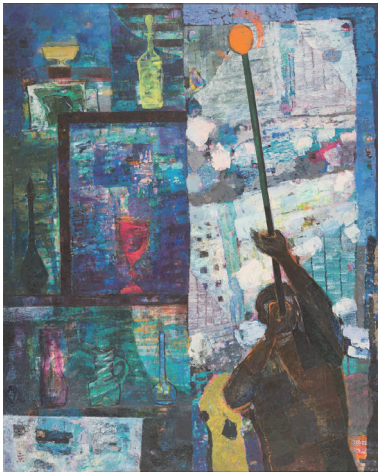
創元会時代の師・中村一郎さん（１９１８～１９９３）は、玉野の三井造船でボイラーマンとして働きながらに地元の海や山を重厚なマチエールで描いた。河合さんは師・中村のマチエールを継いだが、モチーフは人のいる情景を描いた。なかでも、吹きガラスの工房に取材したシリーズは、持ち前の大胆な色彩を抑制しながら、暖色と寒色のバランス、面と線の構成、そして工人の動きと防具のマスクを付けた工人の隠された表情、「用の美」を生み出す無心な行動を通じて、人間の精神性の営みまで描き出し、代表作となった。

芸大進学を断念した彼女だが、生涯そして今も画業とともにある。よき家族を得、師に恵まれ、これまでの多感な人生経験も作品に豊饒さを加えていった。その見事な到達点として「河合京子画集」は完成した。

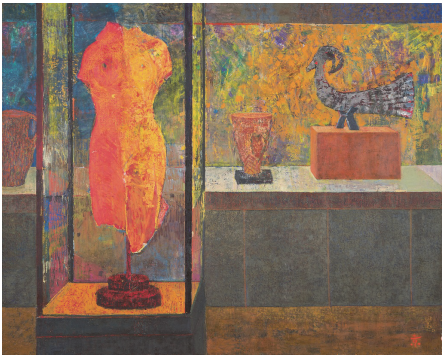
アトリエで創作に励む筆者

昭和61年　日洋会　岡山春期講習会　蒜山国民宿舎にて　左から柳生先生、谷川さん、筆者、中村先生

画集より「油絵」２点



14 瑠璃のひろがりＡ　F100 1987 年
第 19 回 日展



30 古代からの贈り物　F100 2002 年
第 34 回 日展

画集より「素描」２点

76 人形忠原彫傾世頭（水墨）

59 黒鳥
カズミバレエ教室 蔵

画集より「子供時代の鉛筆画集」４点

にわとり　1953 年（11 歳）
田舎に見られる一対の調和

豆腐とこんにゃく　1951 年（9 歳）
やわらかい四角なものどうしの組み合せ

人物　1958 年（16 歳）
顔　その良さの表情

ウズラ　1957 年（15 歳）

五、河合京子年譜と掲載リスト（省略）

六、あとがき

光陰矢の如しで、今年2月7日で76歳、喜寿を迎えることとなりました。この年齢になり自分でも驚いているような有様です。この機会に、描きためた絵を整理して創作活動の集大成としようと考えました。この節目を逃がすと、もう難しくなるのではないかとの不安もありました。誠に拙い作品集ですが、絵を趣味として参りましたこれまでの足跡として残れば幸いなことと存じます。

日展出品の中心となった「ガラス工房」の作品では、倉敷の小谷真三先生の工房を何度かお邪魔させていただきました。手吹きガラスを見ていると、静と動が同時にある何か別の世界に入り込んでいく魅力を感じ、あの半透明なブルー、グリーン、イエローなどの色に取りつかれ、私の心はどこまでも大きく進展してゆきました。真っ赤なドロドロのガラス玉を一瞬にして形成していく人、それはまるで、魔術師のような不思議な力を持つ人に見えました。創作のヒントを下さった先生に深謝申し上げます。素晴らしい師である、故・門脇俊一先生、故・中村一郎先生のご指導、また沢山の日展関係の諸先生方に温かく深い教えをいただき、その全てが私の一生の宝となっています。黄土舎(絵の仲間)の人たちとの親しい出逢いは、楽しくもあり、また苦しくも充実した研鑽の年月だったと思います。

最後に、この作品集の出版に際して、柳生尚志先生には作品に寄せて温かいお言葉を賜り、嬉しく思っております。また、多大なご協力とご支援をいただきました美術関係の方々、内田伸一郎写真事務所、㈱セイキの印刷関係の皆様に心よりお礼申し上げます。

生前、主人が絵画の道を理解し、支えてくれました。子供たちもいつも応援してくれましたことが、今日まで続けられた力になりました。日頃の感謝の気持ちを一筆申し添えさせていただきます。